京都春期特別集会聖書講筵　聖霊降臨節祈祷会

活ける証者

――使徒行伝第12章1～16節――

１９７８年5月20日
小池辰雄

聖霊は即能力　祈りは最大の力　祈るとは自分を投げ込むこと

【使徒12】

1その頃ヘロデ王、教会のうちの或人どもを苦しめんとて手を下し、2剣をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。3この事ユダヤ人の心に適いたるを見て、またペテロをも捕う、頃は除酵祭の時なりき。4すでに執りて獄に入れ、過越の後に民のまえに曳き出さんとの心構えにて、四人一組なる四組の兵卒に付してこれを守らせたり。5かくてペテロは獄のなかに囚われ、教会は熱心に彼のために神に祈りをなせり。6ヘロデこれを曳き出さんとする前の夜、ペテロは二つの鎖につながれ、二人の兵卒の間に眠り、番兵らは門口にいて獄を守りたるに、7視よ、主の使ペテロの傍らに立ちて、光明室内に輝く。御使かれの脇をたたき、覚していう。『疾く起きよ』かくて鎖その手より落ちたり』8御使いう、『帯をしめ、鞋をはけ』彼その如くしたれば、又いう、『上衣をまといて我に従え』9ペテロ出でて随いしが、御使のする事の真なるを知らず、幻影を見るならんと思う。10かくて第一・第二の警固を過ぎて町に入るところの鉄の門に到れば、門おのずから彼等のために開け、相共にいでて一つの街を過ぎしとき、直ちに御使はなれたり。11ペテロ我に反りて言う、『われ今まことに知る、主その使を遣わして、ヘロデの手およびユダヤの民の凡て思い設けし事より、我を救い出し給いしを』12斯く悟りてマルコと称うるヨハネの母マリヤの家に往きしが、其処には数多のもの集りて祈りいたり。13ペテロ門の戸を叩きたれば、ロダという婢女さきに出できたり、14ペテロの声なるを知りて、歓喜のあまり門を開けずして走り入り、ペテロの門の前に立てることを告げたれば、15彼ら『汝は気狂えり』と言う。然れどロダはそれなりと言い張る。かれら言う『それはペテロの御使ならん』16然るにペテロなお叩きてやまざれば、かれら門を開き之を見て驚けり。

●聖霊は即能力

今は落穂拾いの時代、世は終末に向かっていますから、こぼれる大事な魂は拾ってあげ

ないと。そして21世紀なんていうのは無事に来そうもないですから、是非とも天国の民を、相手が倒れたら担ぎながら、

「私は天国に往くんだ」

と。人を担ぎながら天国に入るというような気持で――この間、クリストフォロスの話をちょっとしましたが、まぁそういうわけで――是非ともそんな気合でお願いしたいと思います。

「自分はまだ聖霊の体験が本ものでない」

というような方が、或いはあるかも知れません。これは、何時でもそのところに入れる。ちっとも難しいことはない。一番素晴らしいものは絶対無条件の世界ですから。空気は絶対無条件に吸っている。眠っていても空気は吸っている。また空気に囲まれている。我々の魂はそのようにしてキリストの霊に、実は信ずると信じないとに拘らず、おおわれている。何時でも入ってこようとしていらっしゃる。活けるキリストという言葉の奥には、活かすキリストというわけであります。我々には、活かし給うところのキリストでありますので、実際活かされているんです。どうぞ、そういう気合で臨んでください。

「聖霊のバプテスマ」なんていうのは一番楽なはなしなんです。一番難しいなんて思っている。難しくしてしまっているんだよ、キリスト教界は。無教会でも十字架の手前にいる。もう本当にパウロの書簡を読んでも、使徒行伝を読んでも、ペテロ書簡を読んでも、とにかく新約聖書は聖霊が溢れているんだね、どの文字も。聖霊の力をもっていない文字はないんです。パウロが言っている通り、

「御霊なき者はキリスト者に非ず」

と。「御霊なき」というのは、

「御霊を呼吸してない者は」

ということです。使徒行伝10章は、カイザリヤにコルネリオという人がいて、これはイタリヤ隊の百卒長だという。軍人というのは非常に簡単なんですよ。命令に絶対服従する。神さまの命令に絶対服従したのはキリストですから。キリストは本当の軍人なんだよな。命令に服従するといったって、信従するわけだ。コルネリオが御霊の恩寵にあずかるところが書いてあるわけですが、本当にドラマですね。

今、私はここで、コルネリオのことを言おうとしているのではないけれども、ペテロが天来の幻に出っくわす。そして大きな風呂敷みたいのが下りてきて、四隅をもって地に吊り下ろされた。「食べろ」と言われたところが、ペテロがユダヤ人の風習に従って、潔いもの、穢れたるものとの区別をしていた。

「神の潔め給いしものを、なんじ潔からずとすな」

と言われた。

「[24]明くる日カイザリヤに入りし時、コルネリオは親族および親しき朋友を呼

び集めて彼らを待ちいたり。

コルネリオは何か新しいことにあずかるというので、みんなを集めて来た。ペテロの一行を待っていたわけです。

25**ペテロ入り来れば、コルネリオ之を迎え、その足下に伏して拝す。**26**ペテロ彼を起こして言う『立て、我も人なり』」（使徒行伝10・24～26）**

ペテロが如何に聖霊の器であるかは、これを見てもわかる。自分が何か霊的な人物で、偉くなったなんて一つも思っていない。

「無学の凡人」

と前のところに書いてある。「我も人なり」と。ガリラヤの漁師がこれほどにまで御霊を受けると、いわゆる学者の権威よりももっと素晴らしい権威の人になってきますよ。その発する言葉に本当に神の知恵、神の力、神の真理が溢れてくるでしょ。だから、聖霊は凄いです、本当に聖霊の世界に入ると。

「自分も凡人に過ぎない。拝するのはただ神だけである。また神を現じたキリストだけである」

というわけです。

「27**かくて相語りつつ内に入り、多くの人の集れるを見て、**28**ペテロ之に言う、『なんじらの知る如く、ユダヤ人たる者の外の国人と交りまた近づくことは、律法に適わぬ所なり、然れど**

「然れど」というのは、もう福音の世界です。

神は、何人をも穢れたるもの潔からぬ者と言うまじきことを我に示したまえり。』（使徒行伝10・27～28）

ユダヤ人だからどうだ、異邦人だからどうだなんていうことはなくなってしまったと、突き抜けてしまった。民族的な宗教から世界的な宗教に、本当の福音に突き抜けてしまった云々ということが書いてあります。

大事な文句は38節です。

「38**これは神が聖霊と能力とを注ぎ給いしナザレのイエスの事にして、彼は徧くめぐりて善き事をおこない、凡て悪魔に制せらるる者を医せり、神これと偕に在したればなり。」（使徒行伝10・38）**

「聖霊と能力」というような書き方をしていますが、聖霊は即能力なんです。能力の内容はいろいろですけれども、とにかく、聖霊は能力なんです。能力のない聖霊なんていうのはないんです。ですから、皆さんも、聖霊が宿って来ると、何か知らんが能力が出てきてしょうがない。

福音は響きである。その霊的な響きを受けとれば、それが何語であろうとかまわない。何か知らんけれども、その全存在から伝わってくるところの、爆発してくるところのもので

もって、ウワッと全身でもって応じてしまえば、直ちにその世界に入れるようなわけですね。書かれたる文字だよ、この聖書は。だけれど、書かれたる文字として読んでいたらダメですよ、聖書は。聖書の無言の文字の中から響いてくる響きを受けとらなかったら。だから、聖書は読むのではありません、聴くんですよ。ここで誰かが読むでしょ、あんた方は聖書を読まなくていいんだよ、聴いていればいい。神の声は読んだ声ではないんだからね、聴いた声なんだ。神の人に捉えられている。

だから、どこまでも聖書は聴く書であって、読む書ではなかった。解る書ではなくして、降参する書であった。眺めている書ではなくて、その中に入り込む書であった、というわけです。本当ですよ。あなた方がそれを本当にやったら凄いことになるから、老若男女にかかわらず、是非ともそれだけの質の人になって戴きたい。もったいないですよ。そうして一人びとりが、本当の伝道者になって戴きたい。何をしてたっていいんです、仕事は。だけれども、その人の存在が、何か知らんけれども人を動かしていく。

●祈りは最大の力

そういうわけでありまして、今日ぶつかるところは12章です。

1その頃ヘロデ王、教会のうちの或人どもを苦しめんとて手を下し、2剣をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。

ヤコブは最初の殉教者の一人です。ペテロもそのように殺されようとしたわけだ。

3この事ユダヤ人の心に適いたるを見て、またペテロをも捕う、頃は除酵祭の時なりき。4すでに執りて獄に入れ、過越の後に民のまえに曳き出さんとの心構えにて、四人一組なる四組の兵卒に付してこれを守らせたり。

なかなか厳重ですな。

5かくてペテロは獄のなかに囚われ、教会は熱心に彼のために神に祈りをなせり。

魂をこめて祈っていた。「熱心」なんていう言葉ではまだ足りないですよ。魂をうち込んで祈っていました。最大の力は祈りなんです。

「最大の力は祈り」

ということは、我々の祈りそのものに力があるというのではない。祈りにかかって来るところの聖霊の力なんです。祈りの中に本願が入ってくる。悲願が本願と一つになってしまっている。そういう、

「汝の聖意を、どうぞこの器を通して現してください」

といって挺身しているその祈りは、一番力がある。

「祈りは最大の力である」

ということをしっかり受けとって、肝に銘じてください。しかも祈りは、我々の祈り以上

に聴かれている。だから、お願いしていても、実はお願いではないですよ。本当にそれを聖霊が執り成して、お願い以上のことを聴いていらっしゃる。そうすると、「…であろう」なんていう祈りではなくなってしまう。もうある意味において異言になってしまって、言葉が言葉でなくなってしまう。このペテロのために彼らが本当にうちこみの祈りをしていた。

6ヘロデこれを曳き出さんとする前の夜、ペテロは二つの鎖につながれ、二人の兵卒の間に眠り、番兵らは門口にいて獄を守りたるに、7視よ、主の使ペテロの傍らに立ちて、光明室内に輝く。

もう、こういうところに来たら読めなくなるですね、冥想しないと。私は黄色く塗ってあるです、この文字のところを。

御使かれの脇をたたき、

御使がペテロの脇をたたいて覚ましてやった。

覚していう。『疾く起きよ』かくて鎖その手より落ちたり』

どういうことですか。分るの分からないのというどころではないですよ。「かくて鏈落ちたり」と。聖書というのは実に簡潔に書いてある。凄いから、

「これは参りました！」

と言わないですか、あなた方はこういう現実に。

「そんな不思議なことがあるんですか？」

なんて、それではだめ。もう参らなくては本当に。それほどまでにして、神さまは福音を伝えるこの器を、使命のある限り守り給う。これは神の器ですから。ヘロデであろうと、そんなものは何でもない。

8御使いう、『帯をしめ、鞋をはけ』彼その如くしたれば、又いう、『上衣をまといて我に従え』

懇ろな指示ですね。

9ペテロ出でて随いしが、御使のする事の真なるを知らず、幻影を見るならんと思う。

幻かと思った。ペテロもわかんないんです、全然。夢遊病者みたいに、

10かくて第一・第二の警固を過ぎて町に入るところの鉄の門に到れば、門おのずから彼等のために

御使とペテロのために、

開け、相共にいでて一つの街を過ぎしとき、直ちに御使はなれたり。

御使は御使の使命が終ったものだから、すっとどっかへ行ってしまった。復活のキリストがそういうことなさったね、そうかと思うと、戸の閉じてある所に入って来られたり。

教会の人たちの本当の祈りの執成しと、それから御使のこのような驚くべき霊的な現実

と、御霊の世界というのは限りなく深い。また輝かしい、また神秘的なものです。だからもう、祈りの世界で何が起きるか知らん。何が起きるか知らんが、とにかくそのようにしてキリストと、御霊・御言と一つになっていく。

この御言は全部霊言ですから。それをプロテスタントは、ただ「御言、御言」なんて言って、

「この意味がどうだこうだ」

なんて、てんでおかしいよな、「聖書の研究」なんていうのは。もう率直大胆に進まなかったらダメですよ、この信仰の世界は、バカになって行かなくては。そうしてもう単純に行く人が本当に深く入って行く。

●祈るとは自分を投げ込むこと

コリント前書6章17節、

「主につく者はこれと一つ霊となるなり」

と書いてある。キリストにつく者は一つ霊になるんだと。一如になること。

「我を見し者はキリストを見しなり」

という。

「我を見よ」

とペテロもパウロも言った。それは本当にキリストと一つになっていたから、わが内なるキリストと。相対的に、

「自分はキリストと同じような者になりました」

なんて、そんなことを言っているのではない。そういう「一つ」というような信仰の本当の現実を、今の教会、無教会は、全部ずれてしまっている。だから、本当に聖霊の世界に入れない。自分を本当に投げ出していないから。

「清いの清くないの、正しいの正しくないの」

なんて、相対的判断をやっているから。

十字架で贖われた私たちは、無条件に罪から解放された無者なんです。相対的人間小池なんていうのは問題ではありませんよ、こんなのは。そうでない奥に、神さまが、キリストが、

「お前のために私は十字架にかかったよ」

と。

「でも、まだ私はこうなんです」

なんて、何を言うんですか。キリストの十字架の恩寵は無条件ではないんですか。そうしたら、

「本当にありがとうございます！」

と、ぶっ倒れて平伏せば、そこに聖霊は来ざるを得ない。だから、十字架を通らなければ、

聖霊は来なかった。

「我には受くべきバプテスマあり」

と言ったキリストのこの十字架です。彼自身がそうおっしゃった。

「そうしたら、今にお前たちの中にやって来るぞ」

と、もうペテロやヨハネの先を見ておられる。使徒行伝のペテロやヨハネを見ておられる。何という人ですかね、イエスという方は。

「生まれつきのものとは違うんだ、新たに生まれずば」

と言われた。

そういうことで、12章のペテロの現実は、そのようにキリストに救われたペテロを本当に使おうと、御使を通してこのような驚くべきことが起きた。御霊の力です。だから、御霊は愛の力でもある、知恵の力でもある。本当にサタンをやっつける力でもある。病を癒す力でもある。様々な力として作用する。だから、

「神の国は言葉に非ず能力なり」

とパウロが言ったのは、みんなそうなんです。疲れを知らない人になる。

11 **ペテロ我に反りて言う、『われ今まことに知る、主その使を遣わして、ヘロデの手およびユダヤの民の凡て思い設けし事より、我を救い出し給いしを』**

12 **斯く悟りてマルコと称うるヨハネの母マリヤの家に往きしが、**

最後の晩餐のあった処ですね、

其処には数多のもの集りて祈りいたり。

やっぱり祈っていた。ペンテコステは十日間、祈っていたですね、みんなで。

13 **ペテロ門の戸を叩きたれば、ロダという婢女さきに出できたり、**14 **ペテロの声なるを知りて、歓喜のあまり門を開けずして走り入り、ペテロの門の前に立てることを告げたれば、**

みんなその祈っていた人たちは、

15 **彼ら『なんじは気狂えり』と言う。**

それでもまだ言うことを本当だと思っていないんですね、「お前は狂ってしまったか、そんなはずはない」と。

然れどロダはそれなりと言い張る。かれら言う『それはペテロの御使ならん』

16 **然るにペテロなお叩きてやまざれば、かれら門を開き之を見て驚けり。**

福音は実に驚くべき音ずれです。驚嘆驚倒する内容なんです、この福音というのは。このマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書は何と言ったってアルファでオメガです。あなた方は福音書を地で往くような、使徒行伝を本当に地で往くような人になるのが、

「汝らは活ける書なり」

とパウロが言った、その実証者と私たちは成ること。それが本当にキリスト者の生涯の本

当の目的なんです、活ける証者となることが。キリストの活ける証者、これは一番やさしいことなんです、本当は。何にも資格はいらない。御霊を受けるということだけなんです、問題は。この聖書の言葉を直ちに霊言として受けとるということだけなんです。もう読むことが直ちに聴くこと、祈ることなんです。読みながら冥想して祈りの世界に入ってしまうようなところです。

だから、一ヶ所でいいから、ヨハネ伝ならヨハネ伝、マルコ伝ならマルコ伝でいいから、繰返し読んで、本当にその世界に祈り入って、その文字が化体してしまう。この世界には遠慮はいらん。躓くの躓かないの、へったくれもないですよ。この世界に入れば、もうすうすうと天翔（あまがけ）ってしまう。使徒行伝の12章のペテロ、また16章のパウロも凄いんだけれど、私はただここを皆さんと一緒に読んで、この聖霊の力の凄さ、御霊、御使を通してのこの力の凄さを――みんなこれ神の霊、キリストの霊の働きですから、私たちにとってはキリストに宿った霊が本当の聖霊ですから――キリストを本当に受けとることによって、私たちに間違いなく聖霊がやってくる。それで、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

とパウロが言っていることは正に、

「キリストの御霊が我が中（うち）に、われキリストの御霊の中に」

という、もう説明のできないところの一如の世界になる。これでなければ信仰と言えない。「信仰」という言葉が躓きになってしまう。それはどうしてかというと、祈る外にない。祈るとは、自分を投げ込むことなんです。自分を投げ込むことをしなかったら、「一如」なんていったって、頭で一如と言っているだけのはなしです。だから、祈りが大事なんです、投げ込みが。どういう言葉を使うかではないですよ、全存在を投げ入れることです。祈りは最も霊的な行為なんです、内的な行為なんです。いいですね。だから、

「キリストは父の懐（ふところ）にいたところの独子（ひとりご）」

とヨハネ伝の最初のところに書いてあるでしょ、「ふところ」というような意味ですね。どうですか、聖霊なんていうのは実はやさしいことであったかということ。全部、十字架でもって道は開かれていた。全部、贖い取られていたんです。遠慮なく、平伏しの魂で自分を飛び込ませて、

「主さま！　南無キリスト！」

と一言唱えれば、直ちにその世界である。「南無」とは祈入することではないですか。祈り入ることを南無という。

「南無キリスト」

と祈り入れば、直ちにこの中に皆さんが入って、

「ああ、今日はもう本当にパプテスマの前哨戦をやっちゃいました」

ということになります。終ります。